

算命学中庸

【初年】 3 回目

3 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【三つの礎】 その(2) 五行説

【初年】 3 回目 【三つの礎】 その(2) 五行説 01

(2) 五行説 ごぎょうせつ

木星が発見されて〔1 2〕という数字に注目するきっかけになりましたが、当時発見された惑星はほかにもあります。

木星のほかに「火星・土星・金星・水星」これら4つの惑星^{わくせい}もほぼ同時に発見されたのです。

木星のほかに、火星・土星・金星・水星も発見された。

この5つを五惑星としたわけです。

ごわくせい
五惑星

当時は望遠鏡などありません。

いま
現在の時代では……てんのうせい天王星・かいおうせい海王星・めいおうせい冥王星などの惑星が
発見されていますが、当時、肉眼で見ることができた惑星
は五つだけでした。

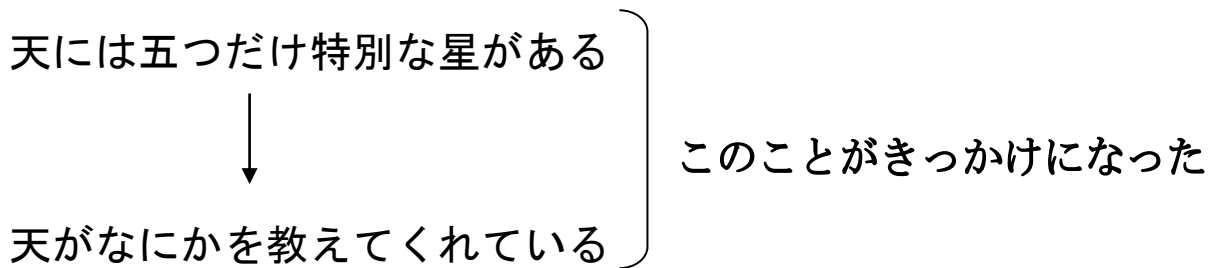
⇒ 当時の人達の感覚で——この事象について考えてみま
しょう。

夜空を仰ぐと、何千・何万の星があるのに、何故なのか、
この五つの星だけは、ほかの無数の星とは違う方向へ移動
します。星を観察していた人にすれば、その動きはとても
不思議な事象であり、五惑星は特殊な星だったわけです。

これら五つの星だけは、ほかの星に比べて、ひときわ明る
い星でした。そして、ほかに数えきれないほどある星の動
きとは、まったく異なる動き方をしている特別な星だとい
うことがわかったのです。

当時の人たちにしてみれば、夜空をあおぎ見ると、きらき
らと無数の星が輝くなかに、五つだけ特別な星がある。

これは「天がなにかを教えてくれているのでは……」 そのような感覚にとらわれたことでしょう。



ごわくせい
惑星の「五」という数字に、何か重大な意味があるのではないかと……？ というふうに考えたのでしょうか。

ここで間違えてはいけないのは、当時、肉眼で観ることができた惑星は5つだけです。それだから五行説になったということではないのです。特別な五つの星があるという事象によって、「五」という数字に注目するきっかけになったわけです。

天空の無数の星のなかで、5つだけ特別な星があるのは、
「なにか特別な意味があるのでは……？」

「天がなにか、教えてくれているのでは……？」

貴方が夜空に無数の輝きをみたとき、なにを思い描きますか？

[たとえば] 人間の^て掌には、指が五本あります。
どの人の掌を見ても、指は5本ずつあるではないか……。

指五本

あるいは、五体満足という表現をしますが、人間の肉体は、
五体から成り立っているではないか……。

五体

⇒ なにを^{もつ}以て…… ^{ごたい}五体というのかについては、その人の生年月日を^{もと}基にして、「宿命」を出して、五体に当てはめると、その人の体内における、どの部分が病気になりやすいのかという占いがきます。

「宿命の出し方」と「^{びょうせん}病占」の観方はもう少し後で勉強します。

あるいは、死んだ人のお腹を切り開いて、内臓を腑分して
五臓六腑といいますように、誰でも五臓を備えているではないか……。

五臓

五臓というのは、^{はいぞう}肺臓・^{しんぞう}心臓・^{ひぞう}脾臓・^{かんぞう}肝臓・^{じんぞう}腎臓の五つを
意味しますが、どんな人でも、必ず五臓がそなわっている

ということを発見したわけです。

この事柄についても、宿命の観方と併せてご説明します。

あるいは、^{ごかん}五感という言い方をしますが、人間には五つの感覚がそなわっています。

五感

五感について、もうしあげますと――。

目で物を見る「視覚」(しかく)

耳で音を聞く「聴覚」(ちょうかく)

鼻で臭いをかぐ「嗅覚」(きゅうかく)

舌で味を味わう「味覚」(みかく)

皮膚で感じる「触覚」(しょっかく) です。

皮膚で感じる触覚というのは、暑い・寒いなどの^{かんかく}感覚です。

これら五つを^{ごかん}五感といっています。

☞ 本来人間に備わっていない感覚を「^{だいろっかん}第六感」といいます。

五感は人間にそなわっていて、第六感は、本来の肉体にはそなわっていない感覚だという意味で、第六感というふう
に呼ばれるようになったわけです。

第六感は「スウィックス・センス」という映画の題名にもなりましたが、考え方はおなじです。

西洋においても「人間に五感がそなわっている」ことは、昔からわかっていたのです。

五色という色の基本は、赤・青・黄・黒・白です。

五色 ⇒ 赤・青・黄・黒・白

原色といわれるのは、この五色だけです。

この5つの色を混ぜ合わせることによって、どんな色でもつくり出すことができます。

ご存知のように……。

〔たとえば〕赤と青を混ぜれば紫になります。

青と黄色を混ぜれば緑になります。

赤に黒を混合すれば茶色になりますし、赤に白を混ぜればピンクになります。

五つの色を混ぜ合わせれば、どんな色も作り出せます。

しかし……これら5色だけは、ほかの色からは作りだせない色なのです。

そして、五味ごみがあります。

昔から中国では、五味といいまして、食べ物の味も五つの味覚しかない。と考えていたのです。

す酸っぱい・にが苦い・あま甘い・から辛い・しおから塩辛い

酸っぱい・苦い・甘い・辛い・塩辛い、の五つを五味といいます。この五味についても、よく考えて頂きたいのですが、五種の味以外の食べ物は存在しないはずですが、

先ほどの色とおなじです。

この五つの味を組み合わせることによって、どのような味でも作り出すことができるわけです。

甘酸っぱい味として、梅干しは塩辛くて酸っぱいし、両方が混ざっている味だと思います。

あまから甘辛いという味もありますし、辛くて酸っぱい味もあるでしょうし、にが苦くてす酸っぱい、味もあるでしょう。

五味を混ぜると、どんな味でも作り出せますが、基本的には、この五つの味しかないはずですが。

あるいは、

五季節 ⇒ 春・夏・秋・冬・土用^{どよう}

実は、季節も、春・夏・秋・冬の4つの季節のほかに、土用^{どよう}という季節を中国では考えていました。

この土用についても、後で詳しくやりますが、季節にも五つの季節があると考えていたわけです。

あるいは、五方向……。

五方向 ⇒ 東・西・南・北・中央^{ちゅうおう}

方向も一般的には「東西南北」と表現しますが、東西南北といっても“中央がどこなのか”を決めなければ、東も南も語れないではないか……と考えたのです。

そこで、東西南北に『中央』という方向を入れました。

方向も基本となる方向は、この五種類だと考えたのです。

〔たとえば〕日本は、東洋だといわれています。

東のほうにあるといわれています。しかし、ハワイのほうから見れば日本は西です。アメリカから見たら西です。

では「日本は東にあるのか西にあるのか」といわれたら、中央がどこなのかを、決めてからでなければ、東も西も語れないはずで
す。〔たとえば〕北海道は北のほうにある。と、日本人ならいいま
すがロシアの人たちから見れば、北海道は南にあるわけです。
つまり、中央がどこなのかを、決めなければ、南も北も語れない
のです。

それゆえに、方向をあらわすときに、この『中央』という
のは、基点は欠くことのできない重要な方向なのです。
このことは、あまり知られていないと思いますけど……。

ごほんのう 五本能

五本能というのがあります。

“人間には五つの本能がそなわっている”と、昔の中国で
は考えていたのです。

「五本能」は、算命学で占うときに、とても重要になります。

五本能〔習得本能・魅力本能・伝達本能・攻撃本能・守備本能〕
についても、のちほど勉強していきますけど……

生年月日を基にして、自分あるいは他人^{ひと}の宿命を出して、
その宿命を観たときに、「自分は何本能が強い」とか、

「あなたは——何本能が強くて、何本能が弱い」とかを、読み取る・割り出すことができます。

⇒ ……挙げていけば、きりが無いほど5つの分類があります。

人間には指が五本あり、肉体も五体がそなわっている。

内臓にも五臓があり、感覚にも五感があるというように、人間の肉体も、精神も、感覚も、なぜか五つのものからできている。

「これは偶然ぐうぜんではない」というふうに考えたわけです。

人間の肉体も、精神も、感覚も、五つの種類のものから成立っているのであれば——。

“人間も自然物しぜんぶつであるはずである” とした、自然思想しぜんしそうという考え方があります。(たびたびでてきていますね)

“人間は自然の産物の一つである” という考え方です。

[たとえば] 人間に指が5本あるのは、人間が決めたことではないはずです。人間の指を、なぜ4本にしなかったのか、なぜ6本にしなかったのか……、指が五本あったり、五体があったり、五臓があるのも、これらは全て自然が決めたことでないか、と、考えたわけです。

人間の肉体も、精神も、感覚も、五つのものから出来ているとすれば、自然界そのものが、五つのものから成立っているのではないだろうか。そういう結論に達したのです。

⇒ 自然界は^{ごぎょう}五行で成り立っている

自然界そのものが、^{もともと}元々五つの性質のもので成り立っている。それゆえに、自然の産物である人間も、肉体や精神や感覚が五つのものから出来ていて、それが形になったのではないか……そんなふうに結論づけたわけです。

五行というのは、^{もくせい}木性・^{かせい}火性・^{どせい}土性・^{きんせい}金性・^{すいせい}水性、これら五つを意味します。

五行 ⇒ 木性・火性・土性・金性・水性

自然界を調べると、自然界は〔木性・火性・土性・金性・水性〕これらの五つから成立っている。そのように結論づけました。

“自然界は五行で成立っている”という考え方を「五行説」といいます。

五行説 ⇒ 木性・火性・土性・金性・水性の五つで成立っている。

この五行を音読するときには……。

木性(もくせい)、火性(かせい)、土性(どせい) といえますけれど、

天空の星である木星^{もくせい}、火星^{かせい}とはまったく違います。

木性とか火性のほうは、星ではなくて資質^{ししつ}・性質^{せいしつ}です。

この「性」という文字には「天から与えられた本来の質」という
意味があります。

五行を続けて読むときには [木^も火^っ土^か金^ど水^{ごんすい}] といえます。

木 火 土 金 水 (もっかどごんすい) と呼ぶことが多いです。

ゆえに、木火土金水 (もっかどごんすい) と覚えてくだされば大丈夫です。

昔の中国の人は「自然界は 木^きと火^ひと土^{つち}と金^{きん}と水^{みず} によって
出来ている」きっとそのように考えていたのではないか？

と、現代^{いま}の人たちには、思われてしまうことにもなるかも知れません。

ところが「五行説」はそのように単純ではないのです。

〔たとえば〕木性といえは“木の性質のもの”という意味になります。

木性 ⇒ 木の性質のもの

性質	五行
木の性質を持つもの	木性と言っている

⇒ 以下……おなじです。

火性^{かせい}といえは、火^ひの性質のもの、土性^{どせい}といえは土^{つち}の性質のもの、金性^{きんせい}は金^{かね}の性質のもの、水性^{すいせい}は水^{みず}の性質のものです。つまり、木^きの性質のものならば、すべて木性^{もくせい}のなかに分類されます。

〔たとえば〕木^きにもさまざまな樹木がありますが、松の木も木性なら、杉の木も木性ですし、毎年・花を咲かせる桜や、梅の木も木性ですし、林檎^{りんご}の木、蜜柑^{みかん}の木とか、果物をつけるような木も木性です。

あるいは、もっと小さなものでしたら、その近辺^{きんぺん}に生えている草^{くさ}も木性に入ります。

チューリップとか薔薇^{ばら}、菊のように、花を咲かせる種類も、五行で分類すれば木性に入ります。

人間が食べている^{いね}稲の^み実とか麦、お米、これらも、五行で分類すれば木性に入ります。

野菜もそうです……大根も人参も分類すれば木性のなかに入ります。つまり、自然界に存在する^き木の性質を有するものは、すべて^{もくせい}木性のなかに入ります。

☞ おなじく、^{かせい}火性といえば、^ひ火の質のものは、すべて火性のなかに入ります。

火と書きますので、燃えている^{かえん}火炎は全て火性に分類されるわけですが、火性にもいろいろな火があります。

〔たとえば〕自然界で一番大きな火性といえば太陽です。太陽そのものを分類するといえば、火性に分類されます。また、地上で燃えている火炎にも、さまざまな火があります。木が燃えても火性ですし、紙が燃えても火性ですし、ガスコンロのガスが燃えていても火性ですし、アルコールが燃えていても火性です。

あるいは、火山が噴火して流れた^{ようがん}溶岩の火も火性です。落雷によって、火事が起こったりすれば、雷は電気ですが、電気の火花も火性に分類されます。自然界に存在する物質で、炎のような火はすべて火性に分類されます。

⇒ おなじく土性に関しても、土の性質をもつ全てが土性のなかに分類されます。

地面そのものは土ですが、土にもいろいろな土があります。

田圃^{たんぼ}や畑の耕作に適した肥沃^{ひよく}な土壌^{どじょう}も土性です。

カサカサに乾燥した砂漠のような土地も土性です。

関東ローム層のように、粘土質で粘り気のある土も土性に分類されます。

あるいは、土がたくさん集積して、大きく盛り上がってくれば、それは山になります。分類すれば土性になります。

海底や川底の土や砂のように、湿っている土や砂も土性です。自然界のありとあらゆる土の性質のもの、すべて土性のなかに分類されます。

⇒ 金性は（金の性質）と書きますが、基本的には金属とか鉱物を指しています。

金の性質を有するものは、すべて金性に分類されます。

〔たとえば〕金、銀、ダイヤモンド、ルビーとかの貴金属・宝石類も、この金性のなかに分類されます。

人間が道具としてつかっている鉄、銅、アルミニウム、ガラスとかの鉱物類は、すべて金性のなかに含まれます。

ダイヤ、サファイア、キャッツアイ、それらの高価な石を
“宝石”とっていますが、その^{あた}辺りに転がっている石こ
ろも金性です。

高価である、高価ではない、この価値観は人間が、それら
の物質に値打ちをつけているわけです。

自然界では、宝石も石ころもおなじ価値として考えます。

教室で使用しているホワイト・ボードは、何に分類される
のかといえ、アルミニウムで作られているそうですか
ら、金性に分類されます。

自然界に存在している、ありとあらゆる金性の質のものは、
すべて金性のなかに分類されます。

⇒ ^{ごぎょう}五行〔木火土金水〕の最後の水性ですが、自然界のなか
で、水の性質をもつ液体は全て水性に分類されます。

水といいましてもさまざまな水があります。

自然界における一番大きな水（大量の水）は海の水です。

海を五行で分類すれば、水性に分類されます。

湖も水性、川も水性、雨水も水性です。

あるいは、人間が飲んでいるジュース、お茶、コーヒー、

それらを五行に分類すれば水性になります。

山の湧き水^{わ みず}とか、井戸水のように、透き通ったきれいな水も水性ですし、沼地^{ぬまち}の泥水^{でいすい}のように濁^{にご}った水も水性です。あらゆる水の性質の液体は水性に分類されます。

このようにして、自然界のさまざまな物質を五つに分類しました。

……自然界において、五行に分類できないものは存在していない。という結論に達したのです。

「五行に分類できないものは、自然界には存在していない」

のち
後ほど勉強しますが……木は燃えると火になります。木は火の作用で燃えつきて、灰になって土にもどります。土は固まると金性になります。五行の〔木火土金水〕というのは循環しているのです。つまり、木性は永久に木性という姿ではなくて、木性という物質が、火性の質になるとか、土性の質になるとか……変化していきます。

土が固^{かた}まって、石とか岩の状態になったときには、金性に

分類されますけど、その ^{かたまり}塊 が何かの種類 of 鉱物になることもあるわけです。そうすると金性に分類されます。

土の状態のときは、土性に分類して、^{かたまり}塊 の物質になったときは金性に分類することになります。

“五行に分類できないものはない” といいましたけど、人間を何に分類するべきだとおもいますか……？

算命学は、人間は五行〔木火土金水〕すべてをそなえた存在である。というふうに考えています。

五行のなかで、唯一、生命が宿るものは木性です。

⇒ 自然界に存在する物質は、すべて五行のなかに分類できるといふ考え方が ^{ごぎょうせつ}五行説 です。

当時の賢者は、五行〔木火土金水〕のすべてを備えた存在……それは人間ではないだろうか、と考えたのです。

その ^{あかし}証 として、先ほど申しあげましたように、人間の指は五本あり、肉体は五臓、五感とか、そして五本能を ^{ぐび}具備しているのは、そのあらわれの姿である。と考えたわけです。

人間は五行のすべてをそなえている

「人間は自然界の産物の一物である」という、この考え方が自然思想しぜんしそうです。

そこでは「人間も自然界の一員である」といつているわけです。

自然界そのものが〔木火土金水〕の五行こうせいで構成されているのであれば、自然の産物である人間が、五行を備えているのは、自然な成立ちであるといえます。

そのように考えることができます。

「自然界のなかで、最も五行のバランスが取れているのは人間である」という帰結です。

それゆえに、占いをするときには、その人の宿命を五行であらわして観ることが多いのです。

〔たとえば〕「あなたの宿命は木性が多い宿命です」とか「火性が多い宿命ですね」「土性ばかりですね」とか——「五行のすべてが備わっています」とか、そのように観てゆくようになります。

それらの基もとになっている考え方が「五行説」です。

⇒ 五行説についてですが――。

現代^{いま}の人たちは、数学で十進法をつかっています。

1～10までの十進法によって、数字を表していると思いますが、その十進法の元になったのが、この五行説だといわれています。

そして、五行〔木火土金水〕のそれぞれを「陰^{いん}」と「陽^{よう}」に分けて、10種類に分類するという考え方に繋^{つな}がってゆきます。

五行説をもちいた具体的な占いなどは、これからたびたび出てきます。

その都度^{つど}……皆様には五行説の考え方を、より深めていただきたいとおもいます。

【初年】3回目【三つの礎】その(2) 五行説^{ごぎょうせつ} 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】4回目 【三つの礎】その(3) 陰陽論^{おんようろん}